

司馬江漢がみた飛鳥の風景

— 『吉野紀行』 を読む —

長谷川 透

第1章 はじめに

江戸時代の飛鳥は、西国巡礼の第七番札所である岡寺とその界隈が大いに賑わった。岡寺の前後札所には南法華寺（壺阪寺）と長谷寺があり、それらをつなぐ土佐街道や初瀬街道は巡礼の道として整えられた。また、伊勢参りの流行によって元伊勢である飛鳥坐神社が信仰を集め、多くの参拝客が訪れた。明日香村内では岡寺や元伊勢に続く街道沿いに道標や常夜燈が置かれ、古くは川原寺跡の南西にある寛文13（1673）年銘の道標や同じく大字川原にある龍神社境内にある寛政5（1793）年の太神宮常夜燈が、旅人の道しるべとなった。岡寺周辺や飛鳥坐神社参道には旅籠や宿場もあるにはあったが、飛鳥が一大観光地であったわけではない。むしろ西国巡礼や吉野往来の中継地点としての賑わいであった。江戸時代の花見といえば春は吉野の桜、秋は竜田の紅葉といわれ、大和への旅には吉野の花見を目的とした旅が多かった。その旅路のなかで岡寺に寄るとというのが飛鳥を訪れる最も一般的な旅路であったといえる。

江戸時代前～中期に貝原益軒によって確立された紀行文は、それ以降、実用性と正確さが求められるようになった。その後、国学者である本居宣長の『菅笠日記』の登場によって、紀行文は一個人の内面を描く日記文学と合体し、新しい時代の紀行文学として生まれ変わっていく（板坂2011）。『菅笠日記』は、宣長が吉野の花見とあわせて彼の出生の由緒となった吉野水分神社に参詣した後に、飛鳥の旧所名跡を訪れ、歴史考証を行なった旅日記である。同時期、『雨月物語』で有名な上田秋成も宣長とよく似た行程で吉野と飛鳥を旅し、『岩橋の記』という紀行文を残した。この時代、こうした紀行文において、旅でみた風景や心情を簡明かつ的確な表現で文章を綴ることができる作家は限られていた。さらにいえば、自筆で風景画や写生図を描くことができる作家は極めて稀であったろう。

一方で、玉井定時の『大和名勝志』や植村禹言の『广大和名勝志』、植村の遺志を継いだ秋里籬島の『大和名所図会』といういわゆる名所記には文中に地図や絵図が描かれ、名所の鳥瞰図が描かれた。『大和名所図会』（寛政3（1791）年刊）や『西国三十三所名所図会』（嘉永元（1847）年刊）には、飛鳥の名所として、寺社である岡寺や橘寺、飛鳥坐神社をはじめ、陵墓や石造物である猿石や鬼の俎板・雪隠、碑文のある南淵（請安）先生ノ墓や天徳山竜福寺の石塔などが掲載される。観光地となった寺社を中心に、記紀万葉の地、天皇陵の治定問題を孕んだ古墳や珍奇な石造物が主な対象であった。江戸時代の飛鳥は、名所旧跡と学究的関心の高い地が描かれる対象であった。反対に見栄えのしない地元の知る人ぞ知るような旧跡は描かれることはなかったのである。

そのなかで唯一、近世飛鳥の風景を描いた人物がいる。司馬江漢である。江漢は吉野の花見のために住まいのある江戸から東海道を通過して近畿一円を旅した。彼は旅の回想録を日記風に書き綴った『吉野紀行』を執筆した。江漢が旅で見かけた一風変わった習俗や風景は、文中に挿絵としてしたためた。その挿絵のなかには現明日香村に関する風景画が2枚あった。冬野四軒茶屋から見た大和国中を望む超遠景図と檜隈の里でみた道興寺周辺の近景図である。風景画といっても紀行文の挿絵であり、スケッチに近いといつてよい。近世の紀行文や名所図会で描

かれることのなかった飛鳥の風景が、絵師司馬江漢によって風景画として切り取られた。近世の紀行文において飛鳥の風景が描かれた唯一の例とってよいであろう。今回は、『司馬江漢全集 一』に所収された『吉野紀行』全文を現代語訳し、解説を試みた。そして、江漢がみた飛鳥の風景を中心に考察を行ない、町人学者司馬江漢のまなざしについて迫ってみることとする。

第2章 司馬江漢について

延享4（1747）年、司馬江漢は江戸の芝新銭座（現在の浜松町1丁目）界隈で生まれたとされる。本名は安藤吉次郎といい、後に唐風の「司馬」に改めているが、れっきとした日本人である。裕福な町人階級の出身であったが、若いうちから絵画の修行をし、浮世絵や大和絵、南画（中国の絵画）を習得し、自分の作品を売って生業としていた。一流の町絵師であった彼は銅版画（エッチング）の技法を日本ではじめて発明し、蠟画（油絵）の技法で洋風画にも取り組んだ。こうした銅版画や洋風画は同時代の洋画家平賀源内の影響が大きいとされ、実際に二人には接点があったことがわかっている。司馬江漢が生み出した風景画の構図や画法は後の葛飾北斎の富嶽三十六景にも大きな影響を与えたとされる（池内2018、對中2020）。

彼は絵画研究の目的で江戸から長崎までの往來を丸一年かけて長旅をし、その記録を『西遊旅譚』や『江漢西遊日記』として出版した。これらの日記には紀行文でありながら各地のスケッチを織り交ぜており、文筆でもその才能を発揮した。江漢の旅日記の特徴は、道中のメモやスケッチを基に、ジャンルを超えた本人の関心の高いものについて自由に書き連ね、自筆で挿絵を描くことであった。

彼の業績は画業だけにとどまらず、当時の先端知識であったコペルニクスの地動説や宇宙論、人文地理学的な立場から見た世界の中の日本という当時の日本では斬新な視点を世の人々に紹介した。このような最先端の西洋科学である窮理学に没入した彼は、腐食銅版眼鏡画に用いる眼鏡鏡をはじめ和蘭茶臼（コーヒー挽き）、写真鏡、耳鏡（補聴器）、エレキテルほか地球儀、地転儀、晴雨計、寒暖計、太陽観察用サングラスなども作って見せ、最先端の知識と技術を世に広く知らしめた。正確な図を描く技術者であり、洋の東西を問わずに画法を習得した画家であり、様々な画法の根本にあるモノの捉え方や描き方を自在に変えることができる特異な人物であった。

彼は天才紙一重で、その性格や気性は敵を多くつくってしまう。窮理学を通じて蘭学も学び前野良沢の門下に入って蘭学仲間に加えられていたが、彼は蘭学仲間の批判や悪口をいったり、高慢で傍若無人な振舞いも多かったため、蘭学仲間から疎まれ仲間外れを受けた。生来の見栄っ張りの目立ちたがり屋であり、浅学で生半可な知識をひけらかし、蘭学仲間からこうまんうそ八とあだ名をつけられた。窮理学に目覚めたあとは思想家や哲学者の性格を帯びてくる江漢だが、晩年には年齢を詐称したり自分の死亡通知を出したりと奇行も多く、友人に恵まれず孤独な晩年を送った。しかし、彼の精力的な知的活動は衰えることはなく、晩年に執筆した『春波樓日記』にみえる思想的・哲学的な主張には賛否両論あり、老いてもなお先鋭的だった。文政元（1818）年、71または72歳で没した。

江戸時代当時は文士のなかでも絵も描いていた奇人、雑学者、アマチュア扱いで、画壇の正道ではなく珍奇な新しい物好きの遊び、法螺まじりに新知識を振りまく奇人扱いであった（中村2000）。多彩な才能でもって多くの学問分野に手を出したことが、むしろ「この道一筋」を

評価する日本の伝統な学問姿勢にあわず、学者の論を重視して素人の自由な発想を軽んじる気風ゆえに彼が日本初の業績をもっているにもかかわらず正式な記録に残されることがなかった（池内 2018）。彼が日本における西洋画や西洋科学の黎明を牽引した人物であるが、歴史上の重要人物としてあまり知られていない。近年は再評価が進み、遠近法を先駆的に使いこなした天才画家にして、科学者、博物学者、文筆家であり、「江戸のダ・ヴィンチ」とも評されている（池内 2018）。

第3章 『吉野紀行』現代語訳と旅の行程

以下、『司馬江漢全集 一』（1992年、八坂書房刊）所収の『吉野紀行』全文を筆者なりに現代語訳を行なった。段落の改行は原文通りではなく、筆者が日付ごとに改行した。ゴシック体の小見出しは筆者が付け加えたものであり、当初のものではない。挿絵は飛鳥の風景に関する2点のみ転載し、その他挿絵は紙幅の関係上割愛し、文中に【挿絵】としてその掲載箇所を示している。[註]は筆者が調べられる範囲で、解説し注記をおこなった。地名の後にある（）書きは現地名を記している。読み進める上での読みにくさや違和感、訳文の齟齬と文責は筆者にある。ご寛恕願いたい。

出発

司馬江漢、今年75にして吉野の桜を見たいと思ひ立ち [註1]、へ此世をば 迷ひの夢と知りながら まだ覚めやらで 花を見んとは。天明年申年から酉年までの2年、肥州長崎を遊歴し、またその後京大坂を越え、紀州高野山和歌の浦和歌山を一覧したが、大和の吉野の桜は見ずじまいであった [註2]。

文化壬申二月廿日 [註3]、江戸の芝神僊座を発ち、品川釜屋亭 [註4] で酒を飲んで知人らの見送りを受けた。見送る人に大久保惣治郎 [註5]、奥村喜三郎 [註6]、指物屋久五郎、金物師三治郎がおり、太郎兵衛が両掛を持ち、源蔵が才領となって、松五郎を僕とした [註7]。出立が遅かったので、程谷石田屋の旅舎に泊まる [註8]。

東海道で西に向かう

明るる廿一日、天気にて八里を過ぎて大磯山城屋という家にはからずも泊まる。毎度泊まる家だが、亭主は病死して跡を継いだ弟が出てきて話をする。ムツという魚が多く捕れたので一尾600文で買い、色々にして食べ、気分が快い。

廿二日、早く出立し、小田原から箱根の関所を越え、峠に泊まる。

廿三日、原、吉原の間が曇っていて富士山が見えなかった。府中に泊まる。ここは27・8年前に40日ほど過ごした所だが、そのころの知己は皆死んでしまい、残るは1・2人である [註9]。曲金の九兵衛は大家であり、安在鯛屋清兵衛は甚だ富を得て、今は二代目である。今は前の様ではない。

廿四日は宇津野屋を越え、藤枝の奥州屋五郎左衛門は大家にして、今は二代目となる。我等を知る者は死に絶え一兩人残るのみである。それ故、駕籠の名から見て通り過ぎた。大井川を越えて金谷に泊まる。

富士山を描く

廿五日、出立して金谷台から東方を顧みれば、大井川は幾瀬にもなって流れ、その向こう富士を初めて見る。筆を採ってそのあらましを写生した。【挿絵：二月廿四日、金谷台から富士を望む 下の町は金谷の宿 足高山 宝永山 信濃山雪峰 城跡】

廿六日に見附の駅の大三河屋新左衛門という旅舎に泊まった。その家はとても古く、庭に樹齢 200 年ほどの大蘇鉄を見る。その旅舎では昔風のタバコボン（煙草盆）が出され、茶椀をのせて出す台は古く、飯次は丸木を削り抜いたもので径は 1 尺 23 寸。外回りは木の皮目のようである。朝の手水盥は黒塗り蠟色で、径は 1 尺 67 寸で、これも丸木を削り抜いたもので、入れ子にするため縁にかえりがある。【挿絵：膳、飯次、手水盥】

亭主を呼び出して聞いたところによると、権現様より拝領したものが多くあり、平治弥と同家である。予が知る平治弥は去年病死したが、その向かいの家も平治弥と同じ家で、戦国の時に権現様が甲州の信玄に追いまわれ、この閑道を導いた者どもの子孫である。故に御朱印を所持しているが己の屋敷のみで、その屋敷は上席であるが、貧しく故に旅人宿をして暮らしている。平治弥は旅人宿をしていない。権現様の宮があるので諸侯が通行の時は拝礼してお通りになると言う [註 10]。それから白須賀で一泊する。

学友との交わり

翌日、67 里行って藤川宿（愛知県岡崎市）の手前にある舞木村山中八幡は社頭 50 石で、神職竹尾但馬 [註 11] は志願して江戸に出て予（司馬江漢）の天学の門下に学ぶ。故に一日ここで逗留し、四時過ぎに出立して藤川宿にある称名寺も竹尾氏と同じく江戸に出て天学地転の説に感心して会いに来た。故にここに立ち寄り、そこから漸く七時に池鯉鮒宿に着いた。北西の大風が吹いた。かねてより尾州名古屋は予を知る者がおり、宮宿（熱田神宮）まで来て会えるかどうか頼んだ。ここにおいて名古屋に着いた。長嶋町五丁目の医者伊東藤一、鍋屋町の暦算家水野太郎左衛門 [註 12] は、家業は鋳物師で息子亀次郎は銅板細工を好む。大仏屋喜左衛門は地理を好み、家業は酒造りである。小川廉治は尾州の御家臣で、蘭学を好む [註 13]。玉屋町円山屋金治方に泊まる。皆、菓子を持参して初めて会う。名古屋の旅人宿は皆商人であった。

東海道から伊勢街道へ

その翌日、尾州候が発駕するので、庶民は座して拝見した。ご出立が済んだので我等も出立した。広小路は人が群集していた。それから佐屋に至り、船で三里の渡しを通過して桑名で泊まった。万やという旅舎では女房が出て挨拶をした。これよりは風俗が京に属し、女子の物言いがよい。女子の髪型は変わっていて、この髪を両輪といい、笄は長い。タボと言わずツト、マケと言わずワゲという【挿絵：女子髪】。女房曰く、ある時薩摩の国の衆がお泊りにて、あなた方の物言いは一向にわからないと言うと、おまえらの物言いもわからんと言われた、と。この頃、白魚の価格は一升百文である、と。ここから三里いくと日永村（三重県四日市市）がある。この清水氏の家に 20 日逗留して、菰野の湯の山温泉へは四里あるが、8 日も湯治したことがあった。四日市の諏訪の祭りを見たことあるので、今回は清水源兵衛に会うのを諦めて訪ねず、駕籠の中から見て通り過ぎた。神戸（三重県鈴鹿市）を経て津（三重県津市）に至り、そこからさらに六間茶屋（三重県松阪市）まで行き、そこから右に入って田畑の中を進み青山越えをする。

初瀬街道を行く

畑宿（三重県津市一志町）で一泊し、ここを出立して半里ほど行き、路の傍らに小社がある。その周りには石があり貝杓子に用いる貝のいくらかも付いてある。この山中で出るものか、聞きもせずに通り過ぎた [註 14]。この路は近くの国の田夫の男女 12 ~ 13 人が群がって伊勢皇太神へ参詣する。その中には肥前島原と笠に書いてあるが、女性が多い。青山から一里登ると茶屋がある。昼食をする。山中なので魚がない。干し大根の煮付けの味が良い。18 ~ 19 歳の女

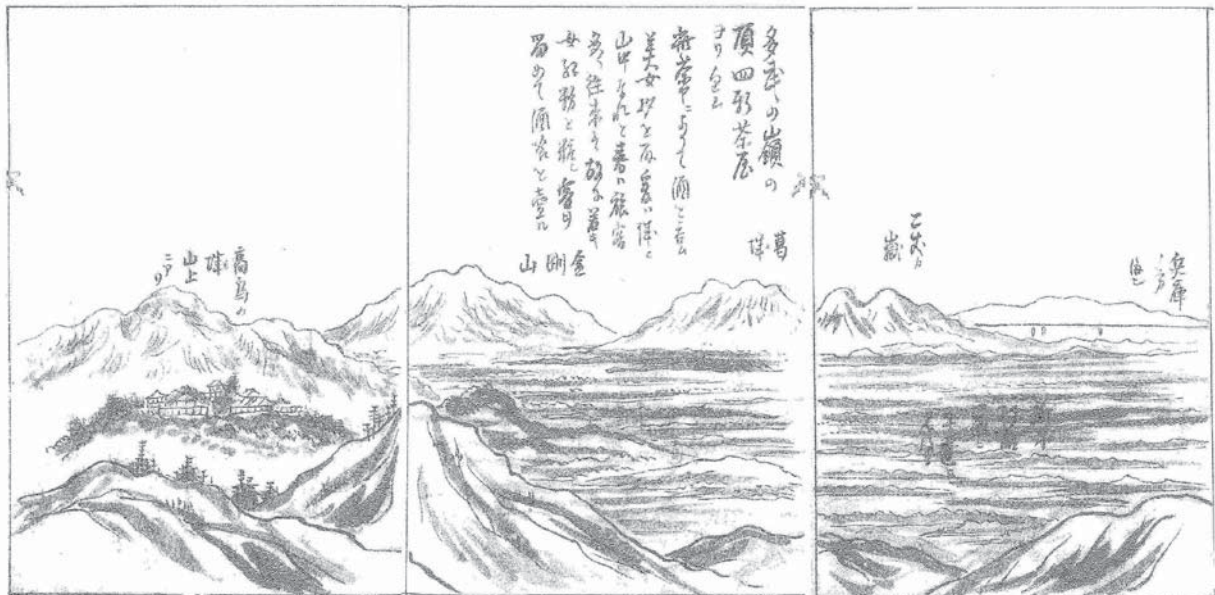
が三人働いているが、そのうち一人は顔色が至って美しい。しゃべり方も良い。しばらくすると、その女性たちが向うのタゴへ尻をまくって小便をした〔註 15〕。みなこの辺の風俗である。伊賀・伊勢の境である。【挿絵：この草は山谷に咲く。花に青白色あり。葉は少し違いがある。薄紅。生エンジ色。】

三月五日は新田（三重県名張市）というところに泊まり、ここの女の話し方がいたって奇妙である。でてきた女房が挨拶したが、その言葉が芝居の女形の話し方であった。そのつつまやかで柔らかい長々とした口上を述べるは山城の言葉よりも良い。

大和の国 長谷から吉野へ

そこから名張という処（伊賀也）を過ぎて、三月六日に長谷に至る。山上から眼下に長谷町を眺め、向かいの山には観音堂郭廊坊舎をみる。誠に奇絶の景色である。廻廊は石段となっていて斜めに三段登る。左右に牡丹を植えている。誠に筆記する事ができない〔註 16〕。ここに一泊した。去年、山津波で家が流れ人も死んだという。本当かと聞いたら、向うの家が流されたのは後ろに小川があって、大雨になって水が出て、大木の松2本が横たわって流れだし、この松のせいでこの川筋の家や土蔵が皆流された。10余町の下流で松が留まって水が左右に流れ、それより下は水勢が弱くなって家は流されず、人も損なっていないと言っていた。

翌朝、出立して見れば、松の木2本そのまま残っていた〔註 17〕。三輪に至り、桜井町を過ぎて多武峰に登る処、倉橋という処にて麦飯酒〔註 18〕を呑む。ここはまったくの田舎である。用明帝崇峻帝の都の跡という。老婦に聞くと陵があると。多武の嶺四軒茶屋から眺望する。【挿絵：兵庫の方、海なり 二丈ガ嶽 葛城 金剛山 樹木村落一面に平遠に見える 多武の嶺の頂四軒茶屋から望む この茶屋に寄りて酒を呑む 美女が杓をとる ここは誠に山中であるが春は旅客多く往来する 故に若き女は紅粉をして客の足を留めて酒や食事を売る 高鳥の城山上にあり】



第1図 挿絵 冬野四軒茶屋からの眺め〔『司馬江漢全集 一』 p.205 ~ 207 を転載〕

三月七日、大職冠鎌足公の神廟（談山神社）あり。ことごとく美である。社領は3千石あり。西の方に小塔あり。名誉の塔なり。大職冠鎌足公の遺骨を長子定慧和尚が摂津国安威山より改

葬した。このことは元亨釈書第九巻の定慧伝にある。廟の左右はみな僧坊である。比叡山の末寺である [註 19]。雨が降り出す。そのため千股村（奈良県吉野町）という田舎に泊まる。ここから吉野まで一里半余りある。

吉野を満喫

三月八日は天気となる。半里行くと上市という処はすこぶる良い処にて、町が縦横にある。そして川の渡し場が山岸にあって人家が続く。下市という処である。吉野川を渡ると、飯貝、そこから丹治という村がある。山間に初めて桜をみる。そこ段々と桜多く咲いて、山の腰から坂を登る。これを七曲坂という。左右の山一面に花である。登りつくして下を望めば皆花である。これを一目千本という。六田の方から吉野への道にて芭蕉の塚（句碑）を見た。ここは山上山下みな花である。ここを過ぎれば吉野町、左右は旅館、その家はみなかけ作りにして二階と見えるのは三階である [註 20]。花のころは京より妓子が来て、家ごとに逗留する客がいて三味線などで弾きたてて騒がしいことである。唐銅の鳥居はとても大きく、高さ2丈5尺、柱の太さ1丈1尺という。この鳥居より少し西に藤井坂という処あり。義経の妾静を吉野法師らが生け捕った処という。蔵王堂は高いところにある。後ろの山門は北に向く。堂は南に向く。実城寺は蔵王堂の乾の方三町ほどにある。寺の所領は三百石ある。後醍醐後村上帝の二帝が56年お住まいになった皇居の地はここである。その時の皇居の建物そのまま模して作り改めた家であるという。都たにさひしかりしを雲晴ぬ吉野の奥の五月雨の空、と後醍醐帝がお詠いなさされた処もここである。その時の太鼓や笙は今も残っている。

吉水院は蔵王堂の先の町より左に二町ばかり下った寺である。文治元年、源義経が大物裏から風波の難を逃れ、この山に登り、夜に入ってひそかにこの寺に入る。吉野法師らが義経を討伐しに来た時に、この寺を出、中院谷に隠れたところ、僧徒が追跡しに来たので、佐藤忠信を残して防矢を射かけ、静を捨て置き、多武の嶺を経て南院の内藤室の十字坊に入ったのだ。また、後醍醐帝が京都から逃れ給い、この寺に潜幸された時、まずこの院に行幸して仮宮とし、後に実城寺に移りなされた。この院の床を御枕にして、花に寐てよしや吉野のよし水の枕の下に石はしる音、御哥あり。また近世豊臣太閤が吉野の花見の時にこの寺に留まって、要害で良い処だ、義経が留まったのも、後醍醐帝がしばし皇居となされたのも、今の家のまま今だ作りかえられていないのだ、と言った。それゆえ家の造りは古風である。

稲荷明神、蔵王堂から一町ほどの処にあり。朝野原燈籠の辻その近くにある。桜か本は、当山の山伏の先達が大峯山に入り修行する寺である。幾間にも画が貼り付けてあった。勝手明神は大宮と若宮の二社がある。北向いにはこの神前にて静が法楽の舞をした装束と義経の鎧が宝蔵にあったが、正保の頃に焼失したと。

竹林院という寺あり。その寺の庭から蔵王堂の方がよく見えて、花がその周りに咲いて誠に奇妙なり。夢違いの観音は道端にあり。大將軍の社は本道筋にあって、その上に辻堂がある。その西を中院谷という。辻堂の上を花矢倉といい、谷々に花が咲いている。忠信が防矢を射た所という。また横川の覚範が討たれた処もこの右の方であると。辰尾は花矢倉の上の方で民家がある。道の左右を布引の桜という [註 21]。世尊寺あり。この処に大きな鐘がある。元亨釈書に日本の木像の始めである由がみえる。

子守明神は西向きの社殿が美麗である。前に町家がある。山の上である。向こう角の茶屋で休んで酒を呑み、たどった跡を望むと蔵王堂や吉野町が残らず見え、花が一面咲き香り、誠に奇妙である。ここは半里か一里ほど隔てて見える。この山の花は近く見ては悪し、山深き故に

山気にて花ものびのびと開かず、誠に山桜にて花の形悪し、故に遠くから見て妙なのである。往来でこの茶店に寄った。これより先は人家がない。平地にしてこの社を少し過ぎゆけば牛頭天王の祠がある。西の方に杉殿という杉林がある。魔所という。遥の谷という処、山の峯より山々はるかに見える岩倉谷がある。金性明神は吉野山の鎮守なり。この処より奥の院まで下りである。蹴ぬけの塔は飛驒の匠が建てたという古い塔である。昔、義経がこの塔の中に隠れて逃れて下の谷に入り、そこから西河に落ち行くという。俗に義経蹴貫の塔という。この塔は一重あり、上はくり屋根を作っている。青峯は塔から南の高山をいう。名所にして古哥が多い。この下に龍か谷がある。義経が馬を捨てた処という。またその東の谷に義経竹をたわめて谷を飛び越えたというところがある。【挿絵：竹林院の園から望む、花の頃は茶店あり、酒肴あり、扱々おもしろし 子守明神の前の茶屋から眺望する、半里を隔、茶やの老婦が言うには、来年は開帳、ここらも修復できているでしょう、またまたの御参詣をおまちしております、と言う】

奥の院安禅寺飯山という。伽藍あり。右の方に多宝塔あり。本堂は蔵王なり。役の行者の作である。四方正面堂、奥の院はこれである。安禅寺から三町程にある。秘仏という。観音不動愛染地蔵。その脇に蔵王堂あり。この辺は誠に深山幽谷である。

山の根からチロチロと清水が湧き流れる処がある。苔清水という。そこから山の腰を廻って二百歩余り行くと少し平らな処に九尺四面の庵がある。西行の木像がある。外に何も無い。旅人は土足で上がりその像を見る。ここには花見の人は来ず、ここに西行は3年住んだという。誠に深山にしてよく3年もいたことだ。安禅寺の前の茶屋から先に大峯に行く道がある。

高滝といえば溪流にして10丈程も岩間を回って落ちる滝である。大滝と言えば滝にあらず。兩岸はおそろしい絶壁、大盤石岩がそびえて水がぬけ出てそれに当たって流れる谷川である。山奥より筏を流す。筏乗りの働きは絶妙である。滝のように流れる処に至ってはその筏を捨て、岩に飛び上がり、筏は水を潜って向こうに出てくるときにまたその筏に岩から飛び乗る事、誠に妙を得ている。落ちたときは命がない。この滝は急流にして筏に乗る事見物する事である。ここより少し手前に岩飛といって、岩がさし出た処で人が裸になって両手を組み、足を一足にそろえて急流に飛び入り、流れの下で出てくる。飛び賃は百文 [註 22]。清明が滝は12、13丈も落ちる良い滝である。高滝と言えばこれも岩間を落ちる滝である。宮滝も滝にあらず溪流なり。樋口という処に人家がある。ここで休み酒食した。国栖には宮滝より一里あり行かなかった。ここは七村あり、昔応神天皇十九年に吉野の宮に行幸したまう時、国栖人が来て一夜酒を献じ哥をうたったことが日本記にある。一村では国栖紙を漉き、厚くて大きい紙である。【挿絵：清明が滝】

桜木の宮は宮滝から五町ほど吉野に帰る道の傍にある。右の方に橋を越えて行くと山がある。林の中に古社がある。これが桜木の宮である。その前を流れる水を象（キサ）の小川という。名所にして古哥多し。橋を外（ト）きさはしという。それより先にきさ谷村がある。高滝の上の山を象（キサ）山という。名所である。化生の窟という処があるここから如意輪寺勝手の社から八町許東にある谷の向うに浄土宗の山寺がある。後醍醐帝を葬った寺である。ここに陵あり。山の上なり。後醍醐帝が自ら造りなされた木像がある。その厨子の扉の内に吉野から熊野までの画があった。巨勢金岡の筆という。その上に帝の宸翰である四首の詩七言絶句である。平仄韻をふんでいる。また硯筒がある。吉野町まで往来六、七里の道である。とても山深く、その道で狼の糞を初めて見た。話に聞いた通り、糞の中に白い毛があった [註 23]。

吉野から飛鳥へ

十日、天気が良く吉野を出立した。初めに来た道に至り、芭蕉塚の前で上下見ても花が満開で、そこから六田の方に行くと両側は並木の桜であった。この道で小童が桜の苗を売る。一本一文である。4・5本植えさせては忽ち抜いてまた売りに出す。それゆえに戒めて、これは蔵王へ神木を植える故、必ず抜いて売る時は神の祟りがあると言ったけれども、また抜いてまた売っていた。この間は五十町ある。六田に至り、渡しがある。四里を過ぎて岡寺で観音を拝み、岡寺から八町ほど入った処に長者の逆舟という陵がある。小高き所に二間半に一間余りの一枚石に硯の如く溝を彫る。溝の深さ四寸程。誠に奇妙である。

土佐町は高鳥城の城下である。この城は多武の嶺四軒茶屋よりよく見える。城主はその下に陳屋（陣屋）を作って住んでいる。檜隈の陵は山中にある。檜隈川は小さき流れである。宣化天皇の都の地という。今、道興寺という寺のかたちあり。僧一人住む。【挿絵：昔は四面に石人あり、その形は異形で解仲という、陵の形はない。この塔は後世建てたものだ】



第2図 挿絵 檜隈道興寺の風景〔『司馬江漢全集 一』 p. 217 を転載〕

豊浦村に難波の堀江の跡がある。小さい池である。近世、その中に宮居の様な形を造る。古く守屋大官が仏像経巻を捨てた処である。飛鳥の里に飛鳥の宮がある。宮の前の家に泊まる [註 24]。

やまのべを経て奈良へ

十一日は天気よく、紀有常宅の跡は石上の町から四、五町南の別所という村にある。その東北の島の中に常の畑がある。井の形が今に残っている。井筒である、傍に柿木あり [註 25]。

内山は丹波市と石上の間の大道から東へ行ったところ、山際の里である。永久寺というのは、鳥羽の院が創立したまう処の真言の寺である。寺領は千石、後醍醐帝が笠置の城を捨ててここに入りなされた。大塔の宮も隠れた処がここである。有〔在〕原寺あり人丸塚あり [註 26]。布留の里は石上の東の山際にある。名所である。布留大明神の社がある。素性法師がここに住

んでいたという。帯とき地蔵は路の傍にある。そこから奈良の方に至る。元興寺の塔は聖徳太子の創立にてとても古く、傾いていた。銭を出して上に登った。塔のみで寺はない [註 27]。南都春日の宮、東大寺大仏殿、興福寺は第一の見物所で、その境内を述べつくすことはできない。旅館が多く、春は旅客が多くて騒がしい。ここに泊まる。

十二日は南都の椿井町古梅園に立ち寄り、兄弟に挨拶する。先の主人は毎度知る人で雅人であるが、いまは故人となった。奥の座敷に通され、薄茶菓子^マを頂き、天覧の大墨二つ^マ径り尺余りの丸形である。そのほか武者甲冑した人形の墨色、唐本の墨譜、墨の形は毎度見たいと思っても見れず、いまはじめて見ることができた。その彫鏤の妙は言うことがない。これは枇杷の木に彫るといふ。それから油煙をとり、墨を造るところを見物する。佛足石の碑文の墨は文字がいたって細かく、先の古梅園の主人の手跡である [註 28]。妙巧をなしている。〔佛足石碑は薬師寺にあり、皇(光)明皇后が作るという〕。ここを去って、西大寺管(菅)原村に至る。管(菅)出生の地である。少し田のような処がある。蓬萊村の唐招提寺、西ノ京の法華寺を見物する [註 29]。小泉という処は片桐候の領地で、能(農か)家に泊まる。

郡山から法隆寺を経て当麻寺へ

十三日、小泉を出立して法隆寺に至ったときが開帳であった。古より不焼であり七堂伽藍にて宝物多く、昼過ぎまで手間取った。宝物書府は外にある。それから竜田に至り、竜田川はその所には見えず、紅葉もない。達磨寺のほかに当麻寺は、中将姫が蓮の糸で織った曼荼羅は朽ち絶えてない。その写しは極彩色で、幅9尺に丈が1丈余り、厨子に入れて124文出して開帳する。前の町に泊まる。法隆寺仁王門は、向かって左は土をもって造るといふ。実なり。天衣の翻った処が少し損じており、土であることがわかる。壁を塗るようにコマキヲして、下塗り上塗りしてその上を彩色したものである。また右の方は(吽形か)は一木の杉の木といふ [註 30]。

竹内街道を通り河内国へ

十四日は雨天、雨はなし。当麻寺を過ぎて上の太子に至る。これより河内の国である。太子村に陵あり。繞りに石塔のような物で外を囲む。経文を彫る。新しく近年造ったものである。その中をまた囲むものには皆梵字を彫る。苔むして古い。その周囲は二百歩ほどである。何度巡ってもこの石の数はわからないと。高さ一丈余り細長い。北に樹木が茂っている [註 31]。

そこから道宝寺に至る [註 32]。本堂の左に観音堂あり。源頼義の墓である。さらに山に登る。源頼家の墓がある。山上には源頼信の墓があり、周りを垣にしている。門前の茶屋で酒喰いし、坪井村八幡に至る。御室といふ。大黒の始めといふ。玉手山安福寺は浄土宗百万遍の末寺、山に登って大阪城を見る。良い処である。尾州候の墳墓あり。そこからして道明寺に至る。真言律の尼寺である。左右五坊ある。門前松屋といふ茶屋に泊まる。

誉田八幡、ここを過ぎて藤井寺観音は札所である。ここから堺まで五町である。その路の池の中に陵のようなものがある。その由緒はしらない [註 33]。この辺は畑で菜の実をとって油とする。この花盛り、見渡す処限りなく黄色である。

堺から天王寺、大坂へ

ここは泉州堺の津にて紀州の街道である。毎度見てるけれども、妙国寺の大蘇鉄、なにわやの笠松、そこから住吉大社に参詣してほどなく四天王寺に至る。先だつて残らず焼失する。大坂紙くず屋といふ者が発起して普請はおおよそ出来た。伏見町の疋田木工兵衛 [註 34] に逢う。それから7時前に日本橋河内屋といふ旅人宿に至る。大阪の知る人を訪ねる。また大阪城に大

久保佐渡守候が加番にて御詰の故、お尋ね申し上げた。城門に入って真田か石をみる。誠に大石である。隅櫓に登る。外から望んでみると違い、大そうなものである。その席にてそのほか御詰合の諸侯両三方に逢う [註 35]。

舞子ガ浜を見に大阪湾を渡る

十八日は天気よく、舞子ガ浜は毎回見ているが良い景色なので今度も見たく、ザコ場 [註 36] から魚舟に乗ってようやく八時頃兵庫に至る。海上で十里である。この海にて採れるイカナゴ【挿絵：イカナゴ1匹】という小魚を塩煮にして俵とし、大和の方にとくさん行くことである。兵庫から舞子ガ浜まで四里に近いという。先ず平清盛の墓を見る。和田岬の筑畷、そこから楠の碑楠寺、広巖寺は碑より少し後ろの山である。禅宗なり。宝物あり。和尚はあわれに言い立てる。和尚は雅人で悟りの話など話したので、とても感心して吉野山及び和尚の像をしたためた。酒と素麺をいただき、日暮れになったので提灯などを借りて旅舎に帰った。

合戦の地一の谷を経て舞子が浜へ

翌朝、兵庫を出立し、村々を過ぎて、摂津国の鎮守である長田大明神あり、村上帝の宮あり、播州の国境、平敦盛の石塔、燕子花の名所、須磨の大裏の跡、テツカイガ峯、ヒヨ鳥越えへ [註 37]。東垂井西垂井村あり。千壺の陵は山の上にある。生焼けの壺は径1尺程、桶のような形、地に埋めて多くある。皆欠けている。仲哀天皇の陵である [註 38]。そこから舞子ガ浜である。

舞子が浜の景色

30年以前と違い、良い料理茶屋が軒を並べている。亭にのぼり酒を飲み楽しみ深し。ここは往来の海道で、左は海波打ち際、向には淡路島が見え、またそのはるかには四国の伊予山、海中の島が数々見え、右はなだらかなる山にて一面に松である。松の葉が短く、他の松と違って砂地といえども地面は固い。童子は松葉をかいて箒にして掃いているようだ。茶碗と猪口盃に舞子浜と焼き付けて売っている。

楠寺の和尚と滝を見に

三月二十日、かねてより楠寺の和尚と約束したため訪ねたところ、待ちかねていた。行厨や酒、菓子の小童に持たせ、和尚が言うには、この寺に住んで18年になるが、先生のために初めてこの滝を見るのだ。和尚が先導して布引の滝に着くと、山深くないが道中で雨が降り出す。小童の生まれ故郷とみえて、熊内村の北田孫右衛門という田夫の家に寄る。ここで行厨を開きしばらくいるうちに雨も小降りになる。和尚が言うには、ここに寄るのも因縁である、何か画でも書でもしたためてやってはどうか。とて、半紙の紙様のものに汚れきった硯を出したので、哥と下にちとばかりの画を書き遣す。後にこの画を何者やが大坂に持ち出し、我等のことを奇妙に話したと言うことを聞いた。それから段々と山に登り、滝を望む。良い滝であった。五段に腰を打って落ちる様はおよそ25・6丈である。女滝あり。これは一筋に落ちる。和尚は滝の詩を二首作り、外側に文を作って予に贈ってくれた。書もおもしろき風にて雅なものであった。それから摩耶山の中腹に旅舎があり、日も晩景となったのでここに泊まった。和尚と共に酒を呑んで酩酊した。

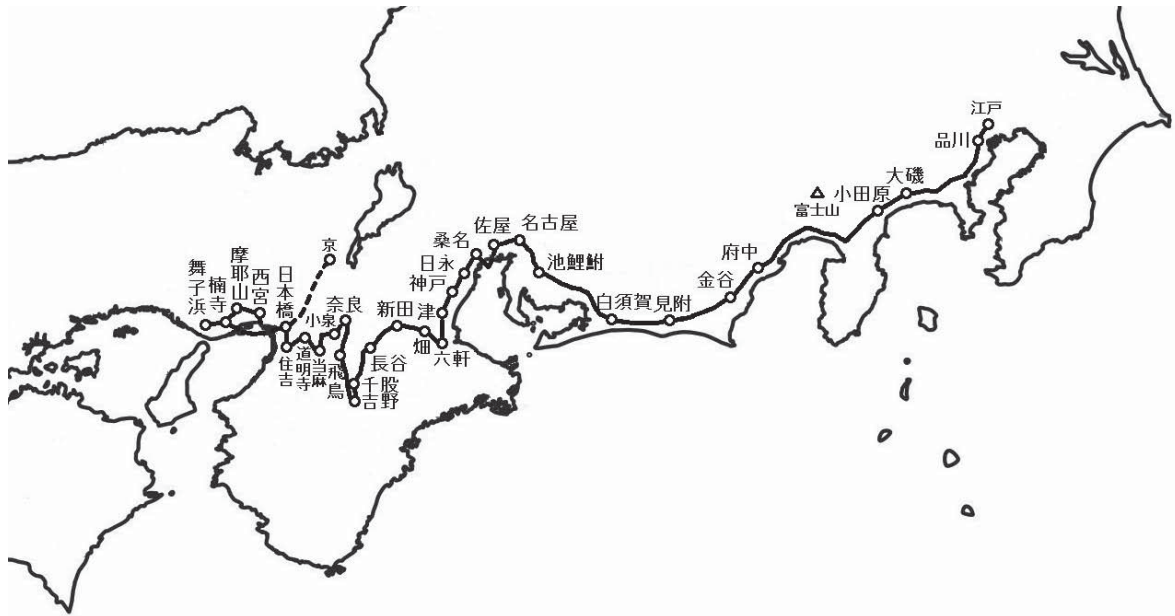
大坂に戻る

翌日天気となる。ここを出て西宮へ行く。それから尼崎に至って舟に乗り、またザコ場に至って大坂日本橋に帰った。

それから四月朔日、京に住む。京の話は別に記す。

表1 『吉野紀行』行程表

月日 (旧暦)	月日 (新暦)	行程	挿絵
二月廿日	4/1	東都芝神僊座→品川釜屋亭にて送別→程谷(保土ヶ谷)石田屋泊	
廿一日	4/2	宿発(天気)→八里過ぎて→大磯山城屋泊	
廿二日	4/3	宿発→小田原→箱根御関所→峠に泊	
廿三日	4/4	宿発→原→(曇りにて富士見得ず)吉原→府中泊	
廿四日	4/5	宿発→宇津野屋→藤枝奥州屋(覗き見)→大井河→金谷泊	
廿五日	4/6	宿発→金谷台より富士を見る	富士山
廿六日	4/7	見附にある大三河屋新左衛門という旅舎に泊	手水盥他
廿七日	4/8	白須賀泊	
廿八日	4/9	藤川駅の手前舞木村山中八幡社→藤川宿→池鯉鮒→名古屋→玉屋町円山屋金治方泊	
		尾州候発駕を拝見→佐屋→船に乗る→桑名万ヤ泊	女子髪
		日永村→清水源兵衛の宅(駕籠より見て過ぎる)	
		神戸→津→六間茶屋→青山越→畑宿泊	
		半里行き→路傍の古社→茶屋にて昼食→伊勢伊賀の境	草花
三月五日	4/16	新田に泊	
六日	4/17	名張伊賀→長谷寺→長谷泊	
七日	4/18	長谷→三輪→桜井町→倉橋→多武の嶺四軒茶屋→大職冠鎌足公神廟→小塔→僧坊→雨が降り出す→千股村泊	眺望図
八日	4/19	天気→上市→吉野川を渡り→飯貝→丹治→桜木を見る→七曲坂→一目千本→芭蕉塚→吉野町→唐銅の鳥居→藤井坂→蔵王堂→吉水院→稻荷明神→竹林院→夢違いの観音→大將軍の社→辻堂→中院谷→花矢倉→布引の桜→世尊寺→子守明神→向隅の茶屋(休憩)→牛頭天王の叢祠→魔処(遥の谷)→金性明神→蹴抜の塔→奥の院安禅寺飯山→苔清水→四面の庵西行の木像→茶屋→高滝→大滝→筏流し→岩飛→清明が滝→宮滝→樋口にて休憩→桜木の宮→象の小川→象山→化生の窟→如意輪寺→浄土宗の山寺(後醍醐帝を葬りし寺・陵・後醍醐帝の木像・巨勢金岡の画・硯笥)→道端で狼の糞を見る	眺望図 眺望図 清明が滝
十日	4/21	(天気良)吉野→芭蕉塚→並木の桜五十町→六田→渡し→四里過ぎて→岡寺→長者の逆舟→豊浦村難波の堀江→飛鳥の里→飛鳥の宮→宮の前なる家に泊まる	道興寺
十一日	4/22	(天気良)紀有常宅跡・有常の畑・井筒・柿の木→内山永久寺→有(在)原寺〔柿本寺カ〕・人丸塚→布留大明神の社→帯解地藏〔帯解寺〕→元興寺の塔→南都春日の宮・東大寺大佛殿・興福寺→旅館泊	
十二日	4/23	古梅園→西大寺→管(菅)原村→蓬萊村→唐招提寺→西の京→法華寺→(大和)小泉の農家泊	
十三日	4/24	小泉→法隆寺→竜田→達磨寺→当麻寺→(寺?)前の町に泊	
十四日	4/25	当麻寺→上の太子→太子村陵→道宝寺(通法寺)→源頼義墓・源頼家墓・源頼信墓→門前の茶屋→坪井村八幡(宮)→(大黒寺)→玉手山安福寺→道明寺→門前松屋泊	
十五日	4/26	誉田八幡(宮)→藤井寺観音(葛井寺)→(池の中に陵・河内大塚山古墳か反正天皇陵百舌鳥耳原北陵)→妙国寺→なにわやの笠松→住吉(大社)→(四)天王寺→日本橋河内屋泊	
		この間に大阪城登城	
十八日	4/29	ザコ場→兵庫→清盛の墓→和田岬筑寫(経ヶ島カ)→楠寺(広厳寺)→旅舎	イカナゴ
十九日	4/30	兵庫→長田大明神・村上帝の宮→敦盛の石塔→燕子花の名所(須磨の前田のかきつばた)→須磨の大裏の跡→テツカイガ峯→ヒヨ鳥越→東垂井西垂井村→千壺の陵・仲哀天皇の陵→舞子ガ浜	
廿日	5/1	布引の滝→熊内村北田孫右衛門家→女滝→摩耶山中腹の旅舎泊	
廿一日	5/2	西の宮→尼ガ崎→ザコ場→大坂日本橋	
四月朔日	5/11	京に住む	



第3図 『吉野紀行』 道程図

第4章 『吉野紀行』 の特徴

『吉野紀行』の大きな特徴は江漢自身が挿絵を描いていることである。日本各地の『名所図会』では俯瞰した名所が描かれるが、文章と挿絵はそれぞれ作家と絵師が別人であることが多い。絵師である江漢は『吉野紀行』以外の紀行文でも挿絵は自ら描いており、一人二役こなすのが普通である。また挿絵の内容も彼自身が興味をひいた風景や旅先での独特な風俗や生活用具を描いている。江戸時代の紀行文は国学の発展に伴って地域の歴史を考証したり、旅先の名所案内の役割を果たすものが多い。一方、江漢の『吉野紀行』はタゴに尻をまくって小便をすとか山城言葉が良いなど、地域特有の食文化や方言、話し言葉の良し悪しを論じ、地域性や異文化の違いに着目して見たこと聞いたことを書き残しているのが特徴であるといえる。

初瀬街道の青山越えから畑宿を過ぎた山中ではかつて海底であった貝の化石を見つけ、それを貝杓子に用いる石と解釈した。彼は国学や歴史には興味が薄い、さりげなく地質学的な発見をした。近代の西洋学問である蘭学や窮理学を学ぶ江漢には事実に基づいたモノやコトを探求する博物学的な素養があり、他地域の文化の違いを論ずる比較文化論的な視点を持ち合わせていた。このような学際的視野から記された『吉野紀行』は、名所案内や歴史の考証とは違い、私的興味に基づいた旅日記であったといえる。

この『吉野紀行』は、吉野を中心に吉野にゆかりの深い人物たちと関連のある地を旅している。吉野から飛鳥を経て和州を巡り、竹内街道から河内国に入り、源義経の祖である河内源氏発祥の地である壺井八幡宮を訪ね、兵庫では一の谷合戦や安徳天皇の内裏跡を見、後醍醐天皇に忠誠を尽くした楠木正成の菩提寺である廣嚴寺（楠寺）では和尚に吉野山の画をしたためた。吉野の花見だけではなく、吉野に足跡を残した人物とその足跡を辿っていることがわかる。

また、江漢は各地の名所となっている御陵を見て回っているが、聖徳太子墓である叡福寺北古墳の石室に入ったり、千壺古墳（現：五色塚古墳）では埴輪について簡潔に書き記している。江漢は御陵や古墳、石塔、墓に興味を抱いていたようだ。江漢の興味のなかでもとりわけ関心が強いものが石である。江漢が吉野の旅の後、京に住まいを移した文化9（1812）年、京都文

化人の集まりである以文会に4回出席し、播州の石の宝殿、石鎌、石斧、勾玉、隕石について発言している（成瀬 1995）。この発言は隕石を除き石製の人工物についてであり、特に人工の石には熱いまなざしを向けている様子が窺える

吉野に向け三輪・桜井を経て倉橋まで来た時、倉橋で一服した店にいる老婦が倉橋には用明帝の都と陵があると話した。しかし、史実では倉橋に宮と陵があるのは崇峻天皇のことであり、江戸時代後期には地元の人々が語る歴史と記紀万葉に記される宮と陵の比定地とが錯誤していることがわかる。この倉橋での会話と似た状況は本居宣長『菅笠日記』の倉橋の段でも語られる。宣長が倉橋から南下して下居に着いた際、あるじのほうしが用明天皇の御陵は長門村（桜井市阿部）にありと言ったことに対し、宣長は間違いであると思い定めたこと『菅笠日記』で述べている。地元の人が語る場所と記紀万葉の地が不一致であることに対し、国学者の宣長は間違いであると嘆くが、江漢は気にかけずにそのまま聞いた通りに書き記している。彼はその中身よりその地域の人たちと語り、その地域の習俗や言葉遣いなどに興味をもっていた。江漢の吉野の旅は、国学者による歴史考証の為の旅ではなく、むしろ地元の人との会話や自ら足を運んで実地で見聞し写生することによって、日本国内のなかで地域性を捉え、比較文化研究を実践していたと考えられる。

江漢は吉野の旅路で古くからの友人・知人に会っている。学問仲間や弟子、大坂城加番（藩主）、古梅園の主人など幅広い。岡崎では途中天文地学の教を乞われることもあった。蘭学仲間から疎まれていた江漢だが、即席で絵を描いたり道中で窮理学の教を請われたりと自分自身の知名度が広く知れ渡っていることに喜びを感じているところがある。また、彼は宿泊先の主人や女房と会話をし、その地域の歴史や出来事を聞き出している。江漢は町人出身でありながら城主から庶民まで幅広い付き合いがあり、身分を越えた人脈をもっていたことが窺える。先述したように、江漢は蘭学仲間からは仲間外れの憂き目にあっているが、多くはないが親しい知人や門人、そして妻子がいたこともわかっている。江漢は学問の探求の前には身分の隔たりなど気にするような人物ではなかった。こうした平等主義に基づく反体制的な思考とその不遜な態度によって、厄介者扱いや仲間外れにされてしまったと思われる。

第5章 江漢が旅した飛鳥の風景

冬野四軒茶屋からみた風景

倉橋から多武の嶺に登った江漢は、四軒茶屋からの眺望を写生し、紅粉をつけた若い美女に酌をとらせ酒を呑んだ。兵庫の海や二上山、葛城山、高取城を一望できる四軒茶屋は明日香村冬野にあった手向け（峠）の茶屋であろう。この茶屋は、同時代の紀行文でも登場し、『菅笠日記』では、「吉野へは。この門のもとより。左にをれて。別れゆく。はるかに山路をのぼりゆきて。手向に茶屋あり。やまとの国中見えわたる所也。」と書かれている。

氷室長翁『吉野日記』〔嘉永元（1848）年〕には「十町はかりたどりくれば四軒屋といふさとにいつ。爰なる松屋か家は、国中第一の眺望と、かねて聞たれはいりて休らふ。けにも大和はさらなり、難波のうら播磨のなたまてみわたされて、おもしろきけしき也けり。さらはとて例の酌かはすほとに、おもわすときをうつしにたり。女共は今朝とく妹か峠のちか道よりつかはしたりければ、」とあり、播磨灘までみえる眺望と江漢が述べる兵庫の海まで見た景色は完全に一致する。また、四軒茶屋で働く女性が吉野や上市から芋峠を近道にして働きに来ていたこと

がわかる。

伴林光平ほか『吉野道の記』〔嘉永3（1850）年〕では「(前略) 御門より出でて、かたへの旅館に尻をかく。ここは四軒茶屋とかいふ所なり。扱て上市迄の道をとへば、三里ばかり有りて、いと嶮しき山つづきなりといふに、(中略)。げにききしよりもけはしき山々にて、かや根、山菅などを力草にて、的場峠などいふ嶮岨を、いくらともなくおりのぼる。」とあり、吉野に行くには、多武峰の西門を出て、四軒茶屋を過ぎ、的場峠を降り登るという位置関係であったことがわかる。

藤井高尚『神の御蔭の日記』〔寛政12（1800）年〕に多武の嶺の十三重塔を経て「うらの門より出て又山路をのぼれバやまとの国うちミゆ、げに青垣山ともにめぐれり、その中に名たたるみつ（三力）山の山あり、天のがく山、なかにうねび山そのみなみにミゆ、耳なし山ハ北のかたにあるよしなれど、ちかき山にかくれてここよりハミえず、まとはとうげというたむけにのぼるにさしてゆく、吉野山はじめて見えたる、」とあり、まとはとうげ（的場峠）に至るとはじめて吉野が見える。

谷森善臣『蘭笠の雫』〔安政4（1857）年〕には「なほ坊どもの前をへて、西門を出れば、茶屋あり。ここより八町険しき道を登りて、冬野村四軒茶屋といふ所にきて休ふ。此所ぞ、此山の最高き所なりける。ここより山下を見おろせば、畝傍山・耳無山・剣池・五條野村の丸山塚など、ただ足もとに見おろさる。此峠をおりて、龍在といふ所にて又休ふ。此わたりより下は、みな吉野郡なり。ここも猶高き所にて、吉野山の花ただむかひに白うみえわたる。」とあり、冬野村四軒茶屋の峠を降り龍在に行くと吉野山がみえると述べており、的場峠が龍在峠であるとわかる。谷森は続けて「猶くだりにくだりて、滝ばた村にて又休む。おるる道いと険しうてなん。低き峠をまた登りくだりてゆけば、千股村なほ山ふところなり、岡寺のかたより吉野にゆく人も、ここにてぞ打あめふる。山を出はなれて行ほどに、とく上市にきぬ。」とあり、多武峰の西口茶屋→冬野茶屋（手向茶屋）→龍在峠（的場茶屋）で休憩をはさみながら、峠を降りて滝畑村で一休みしてまた下って千股村に至り、早く上市に来たと述べている。

司馬江漢もおそらくこのルートで多武峰山系を踏破し、千股で一泊して、上市に入ったのだろう。多武峰を登り峠の茶屋で休んで吉野に入るのは定番の峠道であった。この峠道では天気が急変し雨に降られることもあり、山深いゆえに日暮れが早く、上市まで行こうにも起伏が多い峠道でくたびれて、その途中の千股村で一泊するのが多かったことだろう。

冬野四軒茶屋は国中を望むうえで絶好な場所であった。この眺めは、国中を東から一望でき、向かいの山には金剛山と葛城山、やや誇張された二上山がみえ、南の手前には高取城がよくみえる。とくに大坂から播磨灘まで見える超遠景の景色は江戸時代の旅人の疲れを癒した。多くの旅人が旅日記で書き記すほどの絶景であるが、風景画として描く人はいなかった。風景画を得意とした司馬江漢もここからの景色を気に入り写生した。この絶景を風景画にするのは旅絵師司馬江漢だからできたのであろう。この挿絵は平遠法という東洋の山水画に見られる遠近表現の一つで描かれており、山の頂から遠方の山々を眺望して大和国中にある平坦な盆地の広がりを表現している。三方を山に囲まれ平坦に見える国中の盆地をまるで山地に湾が入り込むように描いている。司馬江漢はこのような湾曲した構図の作品を多く残しているが、この構図を日本の風景画に導入することでより自然で奥行のある風景表現を成功させ、後世の画家に大きな影響を与えた（橋本2010）。大和名所図会のような名所の鳥瞰図とは違い、むしろ名所ではなく、誰も描いたことのない大和国中の風景を見たまま写したこの挿絵は、西洋画法で描かれ



第4図 『吉野紀行』飛鳥周辺行程図 (凡例：推定行路 ● 道標 ▲ 太神宮常夜燈)
 [道標は明日香村教育委員会 2012 『飛鳥の考古学図録⑩ 飛鳥の道標』、太神宮常夜燈は荒井留五郎 1997 『奈良県の太神宮常夜燈』を参考にした。]

た大和国中の真景図として重要な価値があると思われる。冬野四軒茶屋が江戸時代において大和国中の超遠景の視点場であったことと、日本の風景画に新風を吹かせた司馬江漢がここで写生をしたという事実に新たな意義を見出すことができる。

檜隈道興寺の風景

江漢一行は吉野を出立し、六田の渡りで吉野川を渡って飛鳥に向かった。四里（約16km）を過ぎて岡寺の観音を拝するが、六田から岡寺までの距離はおおよそ正確である。しかし、飛鳥と吉野の間には高取山が聳え、江漢一行がどの峠道を越えて飛鳥に入ったのか記していない。六田から直接飛鳥に向かうには上市→千股→芋峠→栢森→稲淵→島庄→岡寺が最短の道程と考えられる。ただ、『吉野紀行』岡寺の後段には土佐町の陣屋や檜隈道興寺のことが記されている。道順からすれば、岡寺に行った後に高取の土佐町に引き返すことは考えづらい。よって、文中の順序を考慮せずにどこに立ち寄ったかの道程を最短でつなぐとすれば、六田を発って壺阪峠→土佐→檜隈→（野口）→岡寺の道程が最短ルートして復元できる。この道程は『菅笠日記』にみえる本居宣長一行の道程とよく似ている。江漢はすでに出版されていた『菅笠日記』を片手に飛鳥への旅路の参考としたと思われる。

また、江漢は岡寺から八町（約870m）入ったところで長者の逆舟という陵を見に行く。小高い処に長さ二間半（約4.5m）、幅一間（約1.8m）の硯のような一枚石とはまさに岡の酒船石のことである。規模が実寸に比べやや小さく、目測の大きさを記している。長者の逆舟（長者の酒ふね）や硯という表現は『菅笠日記』と同じであるが、計測値は異なっている。『吉野紀行』は『菅笠日記』を意識して記されている節があるが、計測値は自分の目測を確かなものとして記したのだろう。江漢は長者の逆舟を「陵」と記し、誠に奇妙なるものだと述べている。江漢は奇妙な石をみると陵や墓石と考える向きがある。それは後述する石人も陵にあるものと考えている。

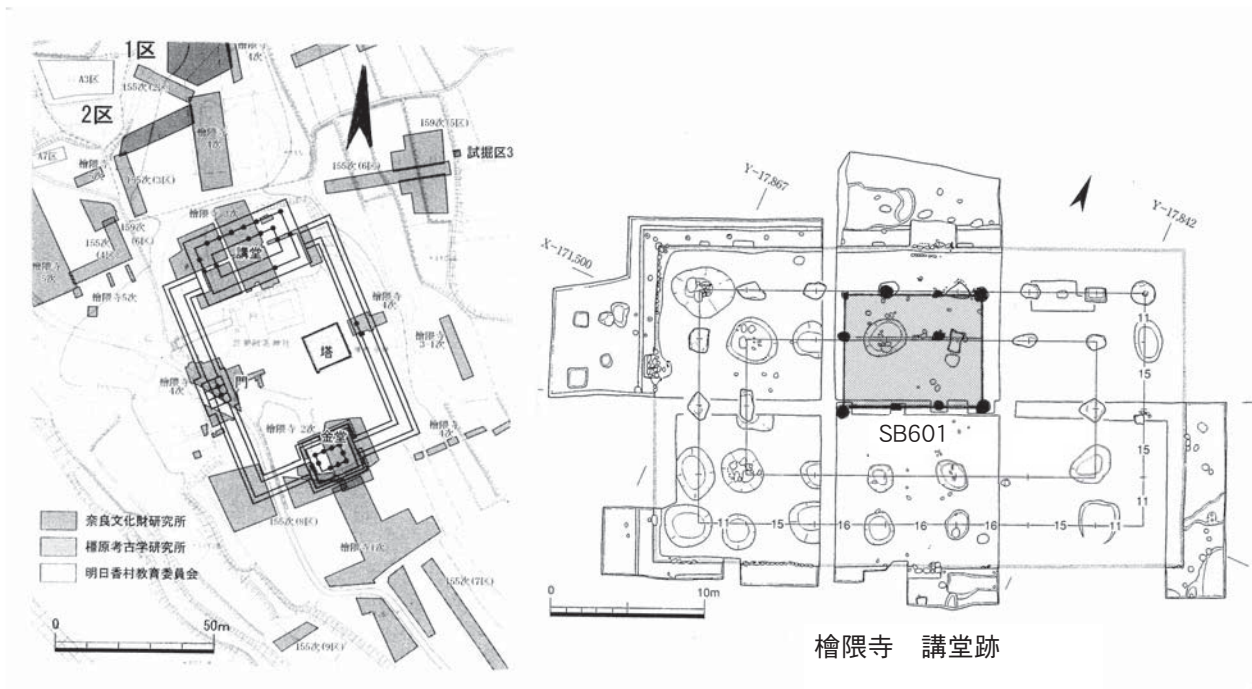
土佐の町の陣屋とは土佐街道沿いにあった高取城城主であった植村家の下屋敷のことである。高取城は冬野四軒茶屋からもよく見え、江漢はその景色を描いている。余談であるが、江漢が高取城主に接見したり、高取藩の医家で有名な服部家を訪ねていない。同時代に生きた服部宗賢は江戸での名声もあり、蘭学や本草学者との交遊があった宗賢が江漢と江戸で接点があってもおかしくはない。『吉野紀行』では近畿に入った江漢が、天文地学や窮理学の啓蒙をおこなった形跡がない。大和には江漢の知人や学友がいなかったのだろう

檜隅〔隈〕の陵は山中にあり、檜隅〔隈〕川は小さい流れとして挿絵に描かれている。檜隈には宣化天皇の廬野宮があったことが正しく記述されている。檜隈には道興寺という寺があり、僧が一人住んでいるとある。そして、この後の記述が挿絵の文中にあってわかりにくい。昔は四面に石人あり、其形は異形、解仲という。石人とは現在吉備姫王墓にある猿石のことである。「解」仲の字をよく見ると、正しくは「翁」仲と読める。翁仲とは猿石の別称である。猿石を石人と表現している例は少ない。四面に石人ありということは実際に四体の猿石を見たのだろう。この時期すでに猿石は欽明陵で四体確認されていて、並河誠所他『大和志』（1736年）では「翁仲二體」、植村兎言『廣大和名勝志』（1764～1780年）では「四躰にして七面の猿の兒」、荒木田久老『大和河内旅路の記』（1782年）では「石にて彫たる人あり。ひとつは男の形（中略）。ひとつは女の形。ひとつは法師にひとつは猿に似たり。」、津川長道『卯花日記』（1829年）では「此山の上二大石にてつくれる石人四軀あり。（中略）里人は庚申といふ。」と記されている。猿石は江戸時代の文献によってその数と配置場所は幾たびか変遷していることが知られる（今

尾 2015)。今尾氏の研究によれば、四体の猿石は、欽明陵における文久の修陵（1864～1865年）により、古墳前方部南側裾から周濠外の南西部に移転し、明治3（1870）年頃に現在の吉備姫王墓に移転されたとした。これを参考にすれば、司馬江漢がみた四体の猿石は欽明陵（梅山古墳）の墳丘南側裾にあった猿石をみたことになる。四面に石人ありとは欽明陵の四面（辺）にあったものと推測したのだろうか。それとも挿絵にある道興寺の石塔の四方に石人が置かれていたと考えたのだろうか。

また、挿絵に描かれた石塔は道興寺の石塔であり、現在の於美阿志神社にある十三重石塔のことを指している。江漢は根拠を示していないもののこの石塔が後世に建てられたものと推定しているが、この推測は間違っていない。多くの旅で石塔や墓石をみている江漢は後世に建てたものと推測しているのだろう。この石塔は現在、於美阿志神社境内にある重要文化財に指定されている十三重石塔であり、いまも現存する。石塔の段数は今と異なるが、周囲に描かれる礎石は檜隈寺の塔基壇の礎石であり、現在もほぼこの挿絵の通りの佇まいである。その石塔の前に描かれた庵が道興寺である。庵の屋根は寄棟形式で茅または藁葺きである。平面構成は奥行1間、正面間数不明の方形平面で、四方には床を張って縁を巡らせている。正面には扉の両側に格子窓があり、窓には蓐戸か突き上げ窓の様子が描かれる。庵の位置は、石塔の斜め前にあって背後に樹木があるが、視点の方角が定かではない。ただし、方角はある程度推測が可能である。道興寺の前身である檜隈寺は、塔を中心にして南に金堂、北に講堂が配置され、それを回廊で取り囲んだ西の正面に中門がある西面伽藍であった。7世紀後半に建てられた檜隈寺は後世に堂塔が倒壊したが、道興寺は檜隈寺の堂塔基壇を踏襲して建てられている。その証左となった昭和56年におこなわれた檜隈寺講堂の調査では、講堂基壇の上面において東西9m、南北7.2mを測る3間×3間の礎石建物S B 601が確認され、この建物に伴う瓦は出土しなかったものの14～15世紀に建てられた三間堂形式の仏堂であることがわかった〔奈良国立文化財研究所1982〕。この礎石建物の東西柱筋は、檜隈寺講堂の北側柱列と一致していて、道興寺は少なくとも14～15世紀までは檜隈寺の平面配置をそのまま踏襲していることがわかる。ただ、江戸時代の道興寺の様子を窺い知る資料は他に確認されておらず、江漢の挿絵によって江戸時代後期までは道興寺に関わる建物が存在していたことを物語っている。発掘調査によって檜隈寺講堂上面にあった礎石建物S B 601がこの挿絵の庵だとすると、斜め後ろにある石塔との位置関係からみて、画の視点は北西方向からみていることになる。おそらく江漢一行は、土佐方面から北に下って檜隈寺西門の前を通過して野口方面に行く道程であったと推測できる。その振り返り様に見た道興寺の姿を写生したものが、この挿絵であったと考えられる。そして、道興寺の下に描かれた檜隈川と背後の山並みは、野口方面に向かって北進するとき右後ろ（南東側）に見える檜隈川とその後ろにある低い丘陵群であったと推測される。

異形な猿石よりも道興寺やその石塔を挿絵に選び、その下に小さく檜隈川を描く。名所図会にも描かれることがなかった何の変哲もない、むしろ寂れてしまった道興寺の庵とこれといって特に珍しくもない寺によくある十三重石塔が何故描かれたのか。確かな答えは導けないが、石の造形が好きな江漢が石塔の佇まいに魅了され、傍らに立つ寂れた庵がなんとも言えぬ風景を醸し出していたのだろう。江漢が現地に興味を惹きつけられたものを趣くままに描いたのだろう。彼が気に入った檜隈道興寺の石塔のある風景画が、江戸時代の檜隈道興寺を知る上で唯一の画であった。そして、檜隈川とその後ろの山並みは、絵師の目から見て、画として残しておくべき佳景であったのだろう。



第5図 檜隈寺伽藍と道興寺の礎石建物SB601（左図：S = 1/2500、右図：S = 1/500）
〔奈良文化財研究所 2005 「(20) 檜隈寺」『奈良文化財研究所 五十年史 本文編』を一部改変〕

第6章 まとめ

『吉野紀行』は全行程を距離にすると約750kmに及び、日程は1か月余りをかけてその旅を終えた。吉野の花見を目的に出発し、そのまま京都で永住するつもりで先を急いだのか、その行程に遊びはなく、むしろ急ピッチで先を急いだ感が否めない。そして、京都での暮らしがなくなって、そこでは富士図の連作や以文会にたびたび出席して発言するなど、楽しいひとときであった。ただ、その楽しい京都生活も江戸の親類による変事によって7か月で終わってしまう。京都永住を始めた7か月後の文化9年11月には京都を発って江戸に帰り、その年の内に『吉野紀行』を執筆した。『吉野紀行』の挿絵は10枚あるが、その内、旅の目的地である吉野が3枚、飛鳥が2枚となる。その内の1枚が冬野から見た超遠景の景色であり、飛鳥地域よりむしろ大和国中の風景である。この風景画が大和盆地全体を眺望する風景画としてその価値と意義はもっと評価されるべきと考える。

司馬江漢は、冬野にある四軒茶屋から大和国中の眺望と檜隈道興寺境内と低い丘陵群に沿って流れる檜隈川を風景画におさめた。この2箇所は江戸時代の紀行文や名所図会に記述はあっても、画に描かれることはなかった。風景画を得意とし、風俗の違いに敏感な江漢ならではの視点として観察力で飛鳥の風景を描いた。江漢自らが旅日記に挿絵を描いたことで『吉野紀行』が日記文学として面白く、そしてわかりやすい効果を生み出している。『吉野紀行』以後に執筆された『江漢西遊日記』はDonald・キーン氏をして「日記文学の白眉」として賞賛されたことが紹介され（池内 2018）、キーン氏が会いたい歴史上の人物として司馬江漢を選ぶだろうとも述べた（對中 2020）とされる。江漢は多芸多才がゆえに人物像に掴みどころがない。江漢の評価は、大きく二分される。生まれつきの法螺吹きでアマチュア扱いされた新しいもの好きの雑学者とみるか、はたまた天才絵師にして窮理学者、思想家とみるか。筆者には人物評できる

だけの学識はないが、新しい物好きでそれを自分のものにするという点で彼はとても日本人的であるように思うのである。

【註】

註1：当時の司馬江漢は年齢を加算して詐称しており、実際は65または66歳であった。吉野の花見を目的とする旅としているが、後に知人に送った書簡では京都に永住することを目的としていたことが綴られている。彼が後に著述した『無言道人筆記』に「文化壬申ノ年、神仙坐ノ家蔵も売払ヒ、京二行、生涯を終ラントテ二月東都を発シテ、吉野ノ花を見、大和ノ国ヲ巡リ」と記し、江戸の芝新銭座の家蔵を売り払って終の棲家を京都に求めてのことであった。「この世をば迷いの夢と知りながらまだ覚めやらせて花を見んとは」と思わせぶりの短歌を詠い、この旅行が楽しみにしていた様子が窺える。

註2：彼は天明八（1788）年四月から丸一年をかけ絵画研究の名目で長崎を遊歴したが、その往路で大坂、復路では大坂と京都に立ち寄っている。寛政十一（1799）年には和歌山県紀州和歌浦や紀三井寺、高野山にも旅行をしているが、その前後で京都と大阪には立ち寄っているが、ついには大和の国や吉野の花を見ずじまいであった。

註3：文化9年2月20日：西暦1812年4月1日

註4：江戸に最も近い品川宿は江戸を発つ旅人を見送る宴会の場であり、南品川には旅人が休息する建場茶屋がたくさんあった。なかでも品川寺門前の「釜屋」は風光明媚でたいへん賑わっていた。

註5：通称大久保惣治郎は大久保一丘のことである。天明年間に生まれ安政6年に没した。江戸時代後期から末期に活躍した絵師である。諱は好古。横須賀藩の御用絵師として活躍した地方画家で、「真人図」と称される洋風人物画が20点ほど残されている。『吉野紀行』に名を連ねていることで司馬江漢の下で学んでいたことがわかる。

註6：奥村喜三郎は江戸時代後期の暦算家である。奥村増地、藤原増地ともいう。生没年不詳。増上寺御霊屋領代官を務めるなか、蘭学を高野長英、測量を伊能忠敬に学び、和算も嗜んだ。幕臣で寺の役人であったが、その優れた技術で渡辺崋山から測量担当に推挙されたこともある。経緯儀（今のトランシット）の使用法を解説した『経緯儀用法図説』を著した。

註7：旅のお供には才領に源蔵をあて、僕には松五郎を従えた。75歳の高齢である司馬江漢は駕籠に乗っての旅であった。

註8：程谷の石田屋は、保土ヶ谷の宿場に名を連ねる石田屋である。東海道の旅行は人生の一大事であるため、品川での盛大な送別を受けると出立が遅くなってしまい、次の戸塚まで足を延ばせず、保土ヶ谷泊まりになることが多かった。弥次喜多道中の『東海道中膝栗毛』には「おとまりはよい程が谷ととめ女 戸塚前でははなさざりけり」とある。

註9：今から27・8年前に40日逗留したのは、長崎遊歴に向かう道中、駿府、庵原、藤枝で40日以上の上長逗留をしている。そこでいろんな人たちと酒を飲んで交友しているうちに里心を起こして江戸に帰るか、長崎まで旅を続けるか逡巡していた。その時にお世話になった人たちがもう死に絶えたと嘆き、駕籠から見ただけで通り過ぎた。

註10：見附宿は静岡県磐田市にある。見附宿は天竜川に接するところにあり、大三河屋新左衛門という旅籠は文化2（1805）年に脇本陣となる。平治弥は戦国時代の安間平次弥のことを指す。国人安間平次弥は武田信玄を追い払った功で徳川家康から見附に住むことを許された人物である。安間平次弥は家康から

多くものを拝領し、家屋敷も拝領した。その子孫たちが本家と分家に分かれるが、その屋敷は上等なものであるものの、経済的に苦しく旅人宿をして生活している。旧知である本家の平次弥は旅人宿をしておらず、さらに去年病死してしまい、同家である主人が司馬江漢の対応をしたということだろう。

註 11：竹尾但馬は竹尾正靱ともいう。額田郡山中村舞木八幡宮の神主を務めた。平田篤胤や伊能忠敬と親交があったとされる。

註 12：水野太郎左衛門は尾張藩鋳物師の総括を務めた鋳物師頭である。水野家は織田信長から鋳物業の特権を与えられ、鍋屋の屋号を有していた。ここに登場する水野太郎左衛門は第 10 代水野太郎左衛門政和であろう。

註 13：小川廉治（次）は、小川守中ともいう。尾張藩付けの家老志水氏の儒医であった。雅楽の研究者として広く知られている。平田篤胤や木村兼葎堂、屋代弘賢とも交流があった。学頭になるほど秀才で、蘭学も学び、蘭書の翻訳の手伝いや本草学にも精通していた。

註 14：原文では、「貝杓子に用ユル、貝のいぐらも付てあり」とあるが、おそらく貝杓子に用いるいたや貝が付いていることを述べていると思われる。山中から出土した貝となると、八太より 30 km 離れた津市榊原町の貝石山にある貝などの化石を多く含む一志層群の露頭が有名である。ただ八太より半里（約 2 km）となると、おなじ一志町高野にある旧初瀬街道沿いの谷戸峠（ポタン峠）のことを述べているのであろう。この峠ではポタン岩が採れ、砂岩の井関石もこのあたりで産出される。かつて海底であった一志層群の岩山を切通して旧初瀬街道の峠道があり、その峠道に敷かれたポタン岩や井関石にイタヤ貝などの貝の化石をみつけたのだろう。

註 15：タゴとは桶のことを指す。肥桶か小便桶に尻をまくり上げて小便するというこの地域の風俗に嫌気がさしている。江戸出身の司馬江漢はたびたび江戸と関西の風俗の違いを述べている。

註 16：山上（愛宕山か）より長谷の町を望み、向かいの山には長谷寺の観音堂、廻廊、坊舎を見て誠に奇絶の景と賞した。本居宣長の『菅笠日記』においても、宣長は化粧坂からみた長谷寺の景色を別世界と絶賛している。「廻廊石階二して斜に三段に登る」とは、長谷寺仁王門から本堂にかけて登廊の石段が上・中・下段の大きく三段になって斜めに登っている様子を述べている。登廊の左右には牡丹が植えられており、筆記できぬ程美しかったようだ。

註 17：「去年山津波とて家を流し人も死すとも云、実なりやと聞キしに、向フの家ハ流^{ウシロ}れたるに後に小川あり、大雨にて水出て大木の松二本よこたわりて流出、此松のために此川筋の家土蔵皆流ル、十余町下^{シモ}にて松留^トまり水左右へ開き、夫よりしてハ水勢も弱くなりて家も不流、人も損したると云、翌朝出立して見れハ松の木二本其まゝありける」。去年（文化 8 年）、長谷では山津波で家が流され、人が亡くなったと言われていたが、事実であったと聞いた。この気象災害は「初瀬流れ」と称された奈良県下の大災禍の一つで、大雨による洪水で長谷周辺の住民や宿泊客が 126 人亡くなっている（奈良県 2014）。「初瀬流れ」については多くの記録が残されており、その実状が知られている。文化八年六月十五日夜五ツ時（1811 年 8 月 3 日午後 8 時ごろ）から降り出した雨が、夜八ツ時（翌午前 2 時ごろ）には短時間に極めて多量の雨となり、初瀬川上流で決壊した。その被害は現桜井市追分・金谷・三輪、現天理市布留・丹波市・岩屋・樺本、現奈良市高樋・中之庄に及ぶが、奈良県以外に特に大きな被害はなく、局地的な大雨であった。司馬江漢が記録した松の大木二本による堰止めの件は、同時期史料である宇陀郡藤井を中心として記録された笹岡家文書にも「松の馬場大方掘れ流れ、松壺丈廻り余の大木町中を流れ、出雲村上の入口にて大木二本横たはり堰に成候故、出雲村は家など損じ不申候、三輪迄田地は村内少々損じ有之候へ共、家などは障り無之候」と同様の記述があり（青木 1956）、司馬江漢も地元の人から正確な話を聞き伝えている。

- 註 18：麦飯酒は麦飯と酒かどぶろくのような酒を指しているのか判断しかねる。
- 註 19：大職冠鎌足公の神廟は談山神社であり、西の方の小塔・名誉の塔は十三重塔、廟の左右の僧坊は妙楽寺のことを指す。
- 註 20：吉野川流域の吉野建ての建物のことを指す。懸造（かけづくり）ともいう。
- 註 21：吉野での行程は参詣した順に詳しく箇条書きで書かれているが、その内容の一部は、貝原益軒が著した『和州巡覧記（大和廻り記）』（元禄9年刊）の内容と酷似している。吉野町に入って唐銅の鳥居から義経蹴貫の塔までは『和州巡覧記』を抜粋する形で引用している。なかでも吉水院の説明は全くの同文で丸写しとなっている。当時、関東からの旅人が『和州巡覧記』を片手に旅行し、同書を手引書としていたことが安田相郎『大和巡日記』（天保9年）に記されている。司馬江漢が吉野のガイドブックとして同書を携帯していたのか、それとも『吉野紀行』を執筆する時に参考にしただけなのかは不明である。本居宣長による『菅笠日記』における旅の持参品は『大和国中独案内』（延宝6年）と『和州巡覧記』であった（本居宣長記念館 Website「ようこそ宣長ワールドへ」より）。江漢一行は宣長と同じ上記2書と『菅笠日記』を旅のガイドブックにしたのかもしれない。
- 註 22：『大和名所図会』における吉野宮滝の件で、飛滝（たきとび）の挿絵がある。江戸時代の宮滝では岩飛といった見物料をもらって岩に飛び込む見世物があった。低いところから飛び込んだら百文、高い処から飛び込んだら二百文の料金をとった。その場所はいまも二百文岩と呼ばれている。この岩飛については貝原益軒の『和州巡覧記』、本居宣長の『菅笠日記』にも記され、人気の見世物であったことが知れる。
- 註 23：初めて狼の糞を見て、糞の中に白い毛があったことを確認した。明治38（1905）年に東吉野村鷲家口でニホンオオカミの最後の捕獲が確認されて以降、絶滅したとされる。江戸後期では吉野にもニホンオオカミがいて、江漢はその糞を目撃した。狼の糞には毛糞と骨糞があり、狼の糞を燃やすと煙がまっすぐあがることから‘狼煙’と呼ばれた。江漢は蘭学を通じて狼の糞を知り得たのだろうか。
- 註 24：飛鳥の宮の前なる家とは、飛鳥坐神社の門前にあった紀伊国屋という旅籠である。飛鳥神社前御定宿紀伊国屋善治郎と書かれた絵図が残されている（明日香村1974『明日香村史』下巻）。このほかにも紀伊国屋の額や看板類もいまに伝わっているが、建物は現存せず今は空地となっている。
- 註 25：井筒は在原業平が著した『伊勢物語』をモチーフとした謡曲『井筒』の舞台である。在原業平と紀有常の娘と居を構えていた天理市櫛本町付近には在原跡寺があったとされる。この辺りは在原千軒と呼ばれ昔はたいへん賑わっていたが、明治時代に廃寺となり、今は在原神社が建っている。文中では井筒の傍に業平が登ったとされる柿木があったと記される。
- 註 26：柿本寺と人丸塚のことである。柿本人麻呂を輩した柿本氏の氏寺で、奈良時代創建で明治時代に廃寺となる。人丸塚は歌聖である柿本人麻呂の歌塚で、人麻呂の墓とも言われている。
- 註 27：元興寺は宝徳3（1451）年に土一揆により金堂や小塔院が焼失し、主要伽藍が失われた。その後、安政6（1859）年には修理中の元興寺五重塔が火災で焼失してしまう。司馬江漢は焼失前の五重塔に金を出して登っている。火災の約40年前にはすでに五重塔が傾いていたことが記され、焼失前の五重塔を知る上で貴重である。
- 註 28：椿井町の古梅園で登場する先の主人が7世当主松井元彙（1716～1782年）のことである。唐本の墨譜や佛足石碑は彼が著した『古梅園墨譜 後編五巻』のことを指す。登場する兄弟とは8世当主松井元孝（1756～1817年）であろう。7世と8世とも大坂の木村兼葎堂と交友があるが、司馬江漢自身も大坂に行くたびに木村兼葎堂にたびたび会っていた。絵師である司馬江漢が木村兼葎堂を通じて古梅園の墨のことを知り、奈良に行くときには墨譜を実見したいと望んでいたのではないかと思われる。

- 註 29：正しくは蓬萊村の法華寺、西ノ京の唐招提寺である。記憶違いか地名と寺院名が置き換わっている。
- 註 30：法隆寺仁王像は左（阿形）が塑像、右が（吽形）が一木の木像であると述べている。欠損部分の観察により、壁を塗るように小舞をして、上に下に塗り重ねてその上に彩色するという塑像の作り方を考察している。
- 註 31：聖徳太子墓とされる叡福寺北古墳のことである。二重の結界石や墳丘部の樹木など今と変わらない聖徳太子墓の様子が記される。聖徳太子墓にまつわる謎のひとつ、結界石を数える度に異なるという逸話も紹介している。「高さ壹丈余ほそ長し」とあるが、高さ一丈は約3mの高さであり、細長いという形容からすると、司馬江漢は聖徳太子墓の石室内を見たのだろう。
- 註 32：道宝寺は大阪府羽曳野市にある通法寺のことである。河内源氏の菩提寺である。
- 註 33：司馬江漢は当麻寺から竹内街道を通り、そこから聖徳太子墓、通法寺、坪井八幡宮、大黒寺、玉手山安福寺の順で見て回り、石川を越えて東高野街道で道明寺、誉田八幡宮に行き、そこから古市街道で藤井寺観音（葛井寺）を見る。その後登場する池の中の陵として、岡ミサンザイ古墳、津堂城山古墳、河内大塚山古墳、雄略陵、大仙陵などのいずれかが候補にあげられる。いずれにしても百舌鳥・古市古墳群のひとつである。
- 註 34：疋田木工兵衛は、大坂伏見町で唐高麗物屋を営んだ疋田奎兵衛のことである。木村兼葎堂とも50回ほどの交遊がある商人で、『摂津名所図会』にも店先の様子を窺い知ることができる。唐高麗物屋としてオランダ、中国、朝鮮の商品を取り次ぎ、木村兼葎堂のような大物蒐集者の要求にんでいた。
- 註 35：大久保佐渡守候は大久保佐渡守忠成のことである。鳥山版藩主で、書画に優れていた。他諸侯両三方はおなじく大坂城加番の増山備中守正寧、松平縫殿頭乗羨、柳沢信濃守里世のことであろう。
- 註 36：大阪市西区にあった雑喉場である。
- 註 37：大坂雑喉場を魚船で出て、和田岬付近で下船し、源平合戦の舞台である一の谷の戦いの舞台を巡っている。須磨の大浦の跡は安徳帝内裏跡である。広巖寺（楠寺）は楠木正成が自刃した菩提寺で、その和尚に吉野山の画を贈っている。吉野の旅を跡付けるように、兵庫では吉野山にゆかりの人物である後醍醐天皇や源義経に関わる地を訪れている。
- 註 38：千壺の陵とは、千壺古墳とも呼ばれる五色塚古墳である。生焼けの壺径1尺（約30cm）は壺型埴輪のことである。
- 註 39：その他、道興寺の資料については高市郡役所1924『奈良縣高市郡寺院誌』（以下『高市郡寺院誌』と略）に詳しい。これによると、明治41（1908）年11月、大阪八尾付近で地鎮の際に発掘された梵鐘に「大和高市郡檜前 奉道興寺鐘一本造工 奉行多武峯黒田 學圓堯秀 永正十一年卯癸十月二日」の銘があったとされる。永正11年（1514）は甲戌歳で癸卯歳ではないことから年号か干支に誤謬があるらしいが、その梵鐘自体が『高市郡寺院誌』執筆段階で行方が知れず、検証できなくなっている。

【参考・引用文献】

- 青木滋一 1956 『奈良県気象災害史』
- 明日香村教育委員会 2008 『飛鳥の考古学図録⑥ 飛鳥の神社～神々がやどる社～』
- 明日香村教育委員会 2012 『飛鳥の考古学図録⑩ 飛鳥の道標』
- 明日香村 1974 『明日香村史』 下巻
- 明日香村 2006 『続明日香村史』 下巻
- 明日香村文化協会 2019 『繫 明日香村の大字に伝わるはなし』
- 網干善教 1984 「近世紀行文にみえる飛鳥の遺跡」『講座 飛鳥の歴史と文学④』 駈々堂

- 荒井留五郎 1997 『奈良県の太神宮常夜燈』
- 池内了 2018 『司馬江漢「江戸のダ・ヴィンチ」の型破り人生』 集英社新書
- 池田末則 1990 『飛鳥地名紀行』 ファラオ企画
- 池田末則 2004 『地名伝承学論 補訂』 クレス出版
- 板坂耀子 2011 『江戸の紀行文 太平の世の旅人たち』 中公新書
- 猪熊兼勝 2009 「宣長の見た酒船石」『季刊 明日香風 110』 財団法人 飛鳥保存財団
- 今尾文明 2015 「幕末維新时期における飛鳥猿石の所在空間」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』
- 對中如雲 2020 『司馬江漢「東海道五十三次の真実」』 祥伝社
- 谷山正道 2022 「江戸時代の旅と飛鳥」 明日香村文化協会 講演会レジュメ
- 奈良県 2014 『歴史から学ぶ奈良の災害史』
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1980 『飛鳥京跡関係史料集（1）近世地誌篇』 奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1980 『飛鳥京跡関係史料集（2）近世紀行文篇』 奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1981 『飛鳥京跡関係史料集（3）近世地誌篇』 奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1981 『飛鳥京跡関係史料集（4）近世地誌篇』 奈良県教育委員会
- 中村真一郎 2000 『木村蒨葭堂のサロン』 新潮社
- 成瀬不二雄 1995 『司馬江漢 生涯と画業』 本文篇, 八坂書房
- 橋本寛子 2010 「司馬江漢の眼鏡絵と油彩風景図に見られる湾曲した海岸線について」『美術史論集』 第10
神戸大学美術史研究会
- 森浩一編 1988 『中公文庫 考古学の先覚者たち』 中央公論社
- 和田萃 1988 「飛鳥のチマタ」『橿原考古学研究所論集 第十』 吉川弘文館
- 和田萃 1993 「宣長の歩いた飛鳥」『季刊 明日香風 47』 財団法人 飛鳥保存財団
- 和田萃 2009 「本居宣長の歩いた飛鳥」『季刊 明日香風 110』 財団法人 飛鳥保存財団